ISSN 0913-1183

和漢薬

9
2011 No.700
wakanyaku

大地の恵みが
からだに優しい

700号記念特集号

「和漢薬」によせて

慶應義塾大学 医学部 漢方医学センター 准教授
渡辺　賢治

大塚敬節の言葉に「伝統は時代時代に合わせて変化してこそ伝統」という言葉がある。かたくなに昔に固執して，時代の変化に対応するように努力をしなければ廃れてしまうのは当然であろう。

世界に先駆けて全身麻酔で乳がんの手術をしたことで知られる華岡青洲（1760 － 1835）は吉益南涯について漢方を学んだことでもよく知られている。その華岡清州の言葉に「方に古今なく，古に泥（なず）むものは今に通ずべからず。　中略　3 苟（いや）しくも人を活すべき者は宜しく為さざることなかるべし。」とある。最初の一文の「古に泥（なず）むものは今に通ずべからず」は痛烈である。当時の多くの漢方家たちは保守的であったのであろう。しかし華岡はそれを打破しようと試み，治療を生き物のようにその場その場で臨機応変に対応していたことが窺える。

大塚敬節が東大時代の長男恭男と同級生の大澤仲昭に漢方を教えていた時に，大澤が「肺炎の漢方治療は何ですか」と問うたのに，敬節先生が「そりゃ君，ペニシリンだよ」と答えたエピソードは有名である。敬節は尿検査もルーチンでやっていた。決して「古に泥む」ことがなかった。何よりも七物降下湯を創方したおりに，当時の最新薬理学を考えに入れた点が面白い。創元社の『漢方医学』から引用すると，「釣藤には脳血管のけいれんを予防する効があるらしいし，黄耆には，毛細血管を拡張して血行をよくする効があるらしいので，これを用いることによって血圧が下がるのではないかというのが私の考えであった」とある。大塚敬節先生もまた，伝統に新しい血を入れ続けた人であった。

わが国の漢方医学も近年劇的な変化を遂げている。和漢薬が創刊された 1951 年は，前年の 1950 年に日本東洋医学会が創設され，漢方復興に燃える大塚敬節，矢数道明らが熱い血をたぎらせていた時代である。その頃はまだ国民皆保険も始まっておらず，当然のことながら自費診療の時代である。当時の診療の様子は大塚敬節の『漢方診療 30 年』に詳しいが，あらゆる疾患に対して漢方治療を試みているのがよく分かる。まだ抗結核薬も確立していない時代なので，結核はじめほとんどの感染症に対しても漢方で治療するしかなかった時代であった。

その後抗生物質の登場によって医療が大きく変わった。現在は高齢化を迎え，社会構造も大きく変化した。医療には「絶対」というものは存在しない。社会のニーズに答えてこそ時代に合った医療なのである。傷寒論の時代は卵黄が貴重で，栄養をつけるためには重要な役割を果たしたかもしれないが，飽食の時代にはそうした卵黄の意義は薄れている。時代時代によって処方の適応も違ってきて然るべきである。そういう意味で 21 世紀の新たな漢方を創っていかなくてはならない。『和漢薬』が 1000 号を迎える時にはさらにまた状況が変わっているであろう。普遍的なものを保持し，変わるべきものを変えていく知恵が必要である。漢方治療同様，時代を読んで「逐機と持重」を見誤らないことが必要であろう。